

令和6年度第1回岐阜市ひきこもり支援連携会議

- 1 日時 令和6年6月25日（火）午後5時30分から午後7時まで
- 2 場所 岐阜市役所庁舎6階 6-1会議室
- 3 出席委員 池上会長、中川副会長、篠田副会長、遠藤委員、工藤委員、杉浦委員、藤原委員、山田（武）委員、山田（裕）委員
（欠席：南出委員）
- 4 事務局 福祉部長、福祉事務所長、福祉部次長、
福祉政策課長、高齢福祉課長、生活福祉二課長、
福祉政策課重層的支援推進室長、地域保健課長、
福祉政策課ひきこもり相談室長、
福祉政策課ひきこもり相談室副主査、
福祉政策課ひきこもり相談室主任

関係部局 社会福祉協議会地域福祉課長、
社会福祉協議会福祉まるごと支援員、
社会・青少年教育課長、
中央青少年会館館長
- 5 次第
 - 1 開会
 - 2 福祉部長挨拶
 - 3 議事
 - (1)今年度の検討テーマについて
 - (2)居場所のあり方について
 - (3)分科会の設置について
 - 4 閉会

○会長

次第の3議事に入ります。

まず、(1)今年度の検討テーマについてです。

資料をご覧ください。

昨年度の会議におきまして、委員の皆様からひきこもり支援に関する議題等

について様々なご意見をいただいたところです。

今年度、本会議において意見交換を行う検討テーマを決定するにあたり、正副会長会議におきまして、皆様のご意見を参考に検討させていただきました。

今年度のテーマとしては、岐阜市のひきこもり支援施策についてということで、ひきこもり地域支援センター事業の実施に向けた検討を行ってまいりたいと思います。

また、各会議でのテーマは資料に記載のとおりですので、よろしくお願いいたします。

次に(2)居場所のあり方についてでございます。

ひきこもり状態にある方の居場所については、国において本人や家族が安心して出かけられる、あるいは受け入れられる居場所が地域社会にあることが、孤立せざるを得ないご本人やご家族が、自分1人ではないんだという安心感と、未来を生きる希望を生み出すために、必要不可欠であるとされています。

また、ひきこもり状態にある方の抱える背景や事情に応じて、一人一人違う状況に応じて、年齢や性別、趣味など多様な居場所作りへの配慮が必要とされているところです。

国がひきこもり地域支援センター事業における5つの必須事業と定めているうちの 하나가居場所になっております。

まず、市の考える居場所について、ひきこもり地域支援センター事業についての説明もあわせて、事務局からお願いします。

○事務局 本市が考える居場所についてご説明いたします。

最初に、ひきこもり地域支援センター事業について、改めてご説明いたします。国のひきこもり支援施策の方向性として、本市のような基礎自治体における支援体制の充実を掲げており、それまで都道府県や政令市であったひきこもり地域支援センターの設置主体を市町村にも拡充しております。

ひきこもり地域支援センターは、専門の相談員によるひきこもりに特化した相談窓口であり、1相談支援、2居場所、3ネットワーク作り、4当事者会、家族会開催、及び5住民向け講演会の実施を必須事業としております。

本市としましては、今後更なるひきこもり支援策の充実に取り組んでいくに当たり、ひきこもり地域支援センター事業を実施してまいりたいと考えております。

一方で、本市では、ひきこもりの方に特化した居場所事業を実施していないことから、来年度以降センター事業を実施するにあたり、今回居場所のあり方について協議をいただければと考えております。

次に本市の考える居場所についてでございます。

行政が取り組んでいる居場所の事例といたしましては、岐阜県では県図書館で実施している対面での居場所「らららの森」や、よりそいネットワークぎふに運営を委託し、実施しているZoomを活用したオンライン場所がございます。

神奈川県などでは、インターネット上の仮想空間であるメタバースを活用した居場所に取り組まれており、また江戸川区ではリアルとオンライン両方の機能を持つハイブリッド型の居場所を実施されております。

このように行政においても多様な取り組みが行われているところです。

居場所につきましては、ひきこもりの状態にある方の抱える背景や事情に応じて多様な居場所作りが必要となっておりまいます。

そのため1ヶ所の居場所で全ての方に対応することは困難であり、行政や支援団体が運営する多様な居場所が連携して取り組むことが必要であると思っております。

そうした中で、本市が居場所に取り組む上では、まずは広くひきこもりの状態にある市民の方を対象とした最初の一步になるような居場所という方向性を考えております。開催方法は外出が難しい方も参加しやすいオンラインでの居場所とし、参加対象者は岐阜市民を中心に、市外の方も参加可能なものと考えておりますが、本日の会議での議論の方向性を踏まえ、具体的に検討してまいりたいと考えております。

以上でございます。

○会長 ただいま紹介のあった東京都江戸川区の居場所については私自身が立ち上げから関わっておりますので、紹介させていただきます。

江戸川区と書かれた資料をご覧ください。

江戸川区の居場所事業は今年で3年目になります。

1年目は、オンラインのZoomとリアルの居場所で行いました。

2年目の昨年度は、オンラインからメタバースへ切り替えて、メタバースとリアルの会場とのハイブリッド型の居場所という形で取り組んでいます。

今年度も同じようにメタバースとリアルのハイブリッドで行っています。

オンライン、メタバースの居場所というのは、自分の部屋から、自宅から、自分の姿、個人情報を知られなくても参加できるという非常にハードルの低さといえますか、そういう関わるきっかけになっているところが非常に効果的ということが実際にわかってきているところで、その結果、実際にまずはオンラインやメタバースから参加された方がリアルの居場所の空気を知って、行ってみたい、出てくるきっかけにもなり、実際に出てこられる方がいたり、あるいは私自身も経験してるんですが、家から出られないひきこもり状態の方のご自宅に招かれて会わせていただくということが実際に起きています。

声を出して話してもいいし、チャットだけでもいい、聞いているだけでもいいと、いろんな選択肢があることで安心できる空間になっているということが一つあるのかなと思います。

昨年度の江戸川区のひきこもりメタバース居場所の写真です。資料にあまり参加者が映らないようにという形の写真ですので、ちょっと雰囲気がわかりにくいかもかもしれませんが、実際リアルに参加者とメタバース上で繋がっている参加者がこうやって対話もできる、一体感が感じられるような工夫がされているということです。

次のページですが、これはメタバース上の画面、いろんな部屋や空間の模様替えが季節によって、主催者が作ることができます。そこにリアルな部屋を中継して、お互いにやり取りももちろんできますし、雰囲気がわかりやすいような工夫がされています。メタバースの特徴としてはアバターだから、自分のことを知られないでも話ができるところが非常に大きいのではないかと感じています。

江戸川区に関しては対話の場を休憩をはさんで2ラウンド制で作っておりまして、参加者の方にあらかじめ江戸川区に応募される段階で自分が話したいテーマを書いてもらい、それを当日の参加者が投票で決めるというやり方をやっています。みんなで提案してみんなで投票したテーマについて話し合う形になっています。

写真に写ってるのは、家族にして欲しいこと、家族にして欲しくないことというテーマで話し合ったときのものです。

ハイブリッドで開催しているので主催する側は大変なんです。リアルな会場のファシリテーターとメタバース上のファシリテーターの2名が必要で対話を促進させる役割を担うわけです。それからこれはメタバースに関して言うとトラブル対応が必要になります。音声やネットワーク環境に関する設営や管理をする。そしてメタバース管理の担当も必要です。これは、例えば入室するときに、どうしても案内が必要な方がいらっしゃるということで入室を誘導していくための案内役。そしてメタバースの操作説明をする係がいた方がいいです。

完全休憩室をリアル会場に設けていますので、休憩管理の担当の方、そして受付、そして江戸川区の主催事業ですので、報告写真の撮影担当が必要です。

それから会場設営に関しては実際に江戸川区で相談事業に関わっていらっしゃる支援者の方に携わってもらって対話の場にも入ってもらおうようにしています。

そして私はコーディネーターという立場でちょっと全体を見るようにしている役割を担って、みんなで分担して運営しています。

内閣府の調査でも実際社会や他人と繋がるきっかけについて、今のあなたにとって安心できる居場所はあるという問いに、インターネット空間であると答えられる方が半数以上になっているという結果があるということがあり、データの的にもそういうニーズがあるということです。

5ページですが実際に対話を行うにあたって対話のルールを、これは私達が実際ファシリテーターと話し合っ、皆さんに説明して場が荒れないようにということです。自分の考えも相手の考えもどちらも大切にとか、ここで個人的な話が出たらそれはここだけの話にしましょう。外には漏らさないということです。そういうことによって安心感を担保するということです。

6ページ目、これはリアル会場用なんです。3つのリボンを作りまして、青いリボンは話しかけてもいいよ、オレンジ色のリボンの方は会話NG、話しかけないでほしいという方。やはりそれぞれ参加ニーズが違いますので、それぞれに沿った対応です。メディアの記者さんが入られるときは、ここに写真撮影をOKな方と、NGな人、そういう意味もオレンジと青で応用することになると思います。それからグリーンはスタッフ用ということです。何かあったときは話しかけてくださいというようなりボンを作っています。

次のページが先ほど言ったように対話のテーマです。

リアルの会場はポストイットを貼ってもらう。そしてメタバース上でも実際に移動してもらって投票に加わって参加してもらうことをやっております。

そして下のページ、覗き部屋と書いてあります。これはリアルの居場所に行きたいんだけど雰囲気が怖い。何かやらされるんじゃないかと警戒される方がとても多いので、ちょっと気になるという方に入口で帰らずにちょっとのぞいてみませんかという部屋を作っているんです。

見てもらって、入ってもらう。安心できたならちょっと入りたいっていう方に入ってもら。あまりここを利用される方はいないんですけども、一応こういう部屋を作っている。

10ページ目に完全休憩室も作っています。ずっとひきこもっていた方がリアル居場所に来たときに、やっぱり体調が悪くなる方々がいらっしゃいますので、そういった方にご配慮して、でもやりとりをちょっと聞いてはいたい方に配慮している。

そして、参加者の方に毎回アンケートをとりまして、必ずこの後に振り返りのミーティングを行っています。振り返りで出たこと、あるいはアンケートでの意見をまた次回に反映させていき、どんどん進化させていくことをやってきたということです。

今年度は廃校になった旧小学校の校舎を丸ごと借りて、そこで次は6月29日

土曜日に行く予定になっています。江戸川区は江戸川区外の方も参加可能ということになっているので岐阜市の皆様にも申し込んでいただければ参加できます。これは皆様からのご意見にもありましたように、知ってる人とか同級生に合うかもしれないので、なかなか自分の自治体の居場所に行けないという方々に配慮してということです。これは双方の自治体で連携していかないと意味がないんですけれども、江戸川区では率先して他の自治体の方の参加を受け入れているということです。

そして12ページは江戸川区で昨年度新たに開設したリアルの居場所駄菓子屋の店舗になります。これも支援者の方、事業者の方に開設してもらって、実際にここで店員の体験もできるようになっています。

この店員の体験は、江戸川区の当事者の方限定になっています。報酬も支払っています。

13ページのとおり奥の方が居場所になっていて、そこはひきこもっている当事者の方が来られるように設けたんですが、特に午前中は、不登校の子どもたちが結構たくさんおられる。

これは江戸川区の協議会でそれを聞いていた中学校の校長先生から、それだったらここに来られた子も出席の扱いにしてもいいのではないかという意見も出ておりました。

最後にこれは江戸川区とは関係ないですが、私自身が兄弟姉妹の立場で家族の立場ということもありましてメタバースを使った兄弟姉妹支部を毎月第3土曜日に開催していますが、実際には兄弟姉妹にとっての居場所になっています。相談する相手もないし、誰に話してもなかなか通じないそういった人たちにとって全国の方が地方からも結構参加される。ほとんど地方の方なんですけれどもそういうこともメタバースを活用すると可能になるということです。

以上になります。

それでは居場所のあり方について皆様からご意見をいただきたいと思えます。居場所に取り組んで見える委員におかれては、取り組み内容や議題等についてご発言いただければと思います。

まず1人当たり5分程度でお願いします

それではまず副会長、その後名簿順で指名していきたいと思えます。

まず、中川副会長から。

○中川副会長 皆さん、こんにちは。

居場所の検討をしていただけるということで大変嬉しく思っています。

私のところでは、リアルの居場所は既に30年以上やっており、本体でやってきた頃は、公的なお金が全然出ないところでずっと30年やってきました。初期

の頃は市民レベルの寄付を集めながら維持してきたんです。1995年に開設したんですが、来ている人たちは子どもたちが中心でした。10代の子どもたちと親さんたちが30代40代といったところですか。

それから30年ほど経ち、若者たちの支援に携わるようになってから、もう20年以上経ちますが、年齢的には中高年の当事者の人たちと、同じ世代の親の立場で来られる人たちがいて、居場所としては非常に雑多な、つまり年齢制限もないし、誰が来てもいいよとなっているので、実に多様な人たちが出入りされています。

リアルな居場所が、実はコロナでしばらく休まざるを得ないときがあり、そのときにオンラインの居場所を2020年か21年の5月の連休明けぐらいから開始しました。今年、岐阜県のひきこもり地域支援センターからオンライン居場所をやってくれないかという話があり、そのときに、きちっと整理して、現在は平日の昼間、金曜日の午後グダグダトークというZoomを使ったオンライン居場所と、それから一つは学び座という若者達の元々交流の場として作った場所をオンラインに移行して、土曜日の夜の8時から月に1回開催しています。ここは割と真面目にお話をする人たちが多く集まっています。

それからもう一つは私達のところでやっておられる哲学カフェがあるんですけど、その哲学カフェをひきこもってなかなか外へ出てくれない人たちにも開放して、月に1回木曜日の夜に開催しています。

だからオンラインだけで言うと、月に6回から7回ぐらい開設しています。他のところでお聞きすると、年に6回、7回というところも多いんですけど、僕たちのところは月に6、7回やっています、きちんと数えてるわけではないんですけど延べで700人ぐらいが参加しています。実数で50人ぐらいです。

実はリアルな居場所と比べると本当にスタートしたころはオンラインで大丈夫なのかという感じで自分自身、非常に懐疑的でした。

ところが、続けてみると非常に面白いことがわかりました。

一つはオンライン会議をやられたことがある方はわかると思いますが、発言者の声を周りの人たちがみんな集中して聞くんです。

リアルな居場所は、こっちでお話してる子もいれば、こっちで居眠りしてる子もいますし、漫画を読んでいる子もいるという非常に分散的な居場所になりがちですけど、オンラインの場合は、その人の発言を丁寧にみんなが聞くことができるということなんです。

それからもう一つ、Zoomを使っているんですけど、ほとんど顔出しはしないです。だから、顔を見ないで言葉だけで交流します。

それからもう一つの発見は、実は対話が苦手な人が文字チャットを使って参

加してくるということ。

これは、さっき池上さんも言われましたけど、進行係の人と文字チャットを専門で見ていくもうひとりの進行係がきちっと配置できれば、そういう場も十分につくれるんだと思っています。

実際3年ほどやりました。昨年12月だったか11月には、オフ会をやるって言って集まりまして、飛騨市で10人ほど集まりました。

普段はオンラインで顔を見せないで言葉だけで交流している人たちがリアルに集まって、それでも旧知の仲のように交流ができるということと言うと、なかなか面白い世界が、実はオンライン上にもあることがわかります。

それから僕たちは開催回数も多いんですけど、ずっと対話を積み重ねていくことで顔も見えないし会ったこともない人たちがとっても親しい関係をそこで作れるということもわかりました。

僕はちょっとメタバースはやったことはないですけど、やはり、その長いこと家族以外の人と会話をしたことがない人たちにとって、そこが社会との対話のリハビリの場所だと表現する子もいましたし、それからゲームだとかマニアックな趣味を持ってる子たちが非常にオンライン上で深い話ができて、普段絶対出会わないような仲間とそこで出会えるということもあったりして、オンライン上の居場所はとても面白い。

それから岐阜県でいうと各地に居場所はいくつか作られていますけれども、岐阜市は多様な居場所がいくつか準備されていて、僕のところだとか杉浦さんのところはふじの湯というスーパー銭湯、それから中央青少年会館でもやっておられるし、自分のお店もあるんですけど、そういう場所を転々とする人たちがいます。

つまり多様な居場所、1ヶ所に固定するのではなくて、居場所同士が連携することによって、いろんな人と出会える機会やチャンスがそこで生まれているんだなと思っています。

だから、そういう場所をいろんな地域にたくさん作り上げていくことで、より良い生きやすい社会というか地域にできていくといいなと思います。

特に働いている人たちの中でも現場で孤立感を感じて、うまく職場で馴染めない人たちが実は仕事のお休みのときに、こういう場所に出てくるなんてこともあるので、単にひきこもりのみでなくて、広い意味での生きづらさを抱えた人たちの場所として居場所が作られているといいなという感想は持っています。

以上です。

○会長 ありがとうございました。篠田副会長お願いします。

○篠田副会長 私は家族会をやっているものですから、ちょっとぶち壊しのような発言をするかもしれませんが、居場所に行ける人っていいです。それができなくて、親は困っているんです。

今、池上さんからメタバースのご紹介がありましたけれど、どうやってその子たちに、この情報を届けるのかも一つ問題だと思っています。

私達、親の会からすると、うちも居場所として読書会やったり、お花をやったりいろいろやっています。

親は、子どもが誰とも繋がろうとしないところでつまづいてるわけです。私は、ここが一番難しいところだと思っていて、それで居場所を最初にやるって聞いてクエスチョンがつかしました。

むしろ次に予定されている支援が届かないところ、ここも一緒に考えていかないと本当に外出できる人だけのひきこもり支援になる。ここを私達はしっかり見ていかなきゃいけない。

親の会に繋がってる人は、まだ極一部なんです。私は推定値、岐阜市5,000人でもっと多いと思っていますが、ほとんどの人は家族だけで抱え込んでしまうというところが、ひきこもり問題の一番難しいところだと思っていますので、居場所を作る、岐阜市が取り組んでひきこもり地域支援センターにするという意気込みは、とても評価して来年に向けてやらなきゃいけないことではあります。少しそういう居場所に対してはクエスチョンがついている。居場所に行くことができる人は、ひきこもっているんですか、行けるんだったら私達親の会はひきこもっているという感じではないんです。

だから、一体これが若者支援をするのか、本当にひきこもりの支援にするのかっていうのは、私いつも疑問に思うところなんです。外に出ることができるんだったら親の会からしたら半分以上解決してます。出ていけないところが解決していない。そこが誰もできてないところだと思います。

だから、むしろ居場所として親の居場所を作ってもらいたい。

それから居場所に出てきて、社会にその子たちが繋がったのはどのぐらいいるんだろうというのも少し疑問に思っていて、居場所で終わっちゃったら、やっぱり駄目です。別に正社員とかそういうことではなく、社会とどう繋がっていけるようにするのも大きな問題であると思います。

○会長 遠藤委員お願いします。

○遠藤委員 岐阜市北山にあります、みどり病院のすこやか診療所で精神科の医師をしています遠藤と申します。

私の立場から居場所の話をどうするか、少し考えていたんですが、私は医療機関で医師をしているんですが、やはり、ひきこもりを困難の一つと感じ受診

される方がかなり多くいらっしゃいます。

いろんな背景といいますか、精神疾患や障がいがある方、もちろんない方もいらっしゃいますが、一つ言えることは、やはりどこかに繋がっている、孤立していないということは非常に予後を良くする。複雑化されている事例を複雑化させない一つの重要なポイントであろうということは、日々感じますし、そう言えると思います。

一方で、どうやって繋がるのかという限界も我々は非常に感じていまして、医療という枠の中での限界というところですが、例えば私も診療や訪問看護をしたりして地域での生活を維持すること、そこで暮らすこと自体を支えることは何とかやれているんですが、孤立した状態から我々以外のどこに繋がるのかということが非常に困難です。

何が困難なのかは非常に悩ましいところではあるんですが、先ほど中川さんがおっしゃった話に近いところはあるんですが、多様な居場所が担保されているかどうかは非常に重要ではないかと思っています。

ある当事者から言えば、この居場所は非常に行きやすいけれど、ここはちょっと行きづらい。逆もあつたりしますし、多様なところがある。

アクセスという点でも多様な居場所がある。非常に遠くから来ている方で岐阜市には、こういう居場所がありますが、来れますかと言ったら無理ですという話になったことがあったんです。自分の近くにそういう居場所があるかが非常に重要であろうということ。

また、行ってみて、ちょっとうまくいかなかったけれども、また行ってみたいと思えるかどうか。別の場所でもそうかもしれませんが1回行って、何かすごく嫌な思い出があつて、アクセス上そこしか行けない状況だともう無理だなと感じられる方もいらっしゃるという話はある。トライアンドエラーが許される状況も非常に重要と思っていました。

あとは我々も医療機関ではあるんですが、若者のグループといいますか30歳前半ぐらいまでの方で生きづらさを抱えている方、なかなか社会に出にくい方を対象に、一回集まりをしようということでやっています。

あくまで居場所はそこに居ていいと思えることが一番だと思うので、僕らはそれを目指すんだけど、やはり医療機関の難しさなのか、医療機関は治療するという話なので、少し違ってくるのかなと思っていて、どうしても患者さんの立場で見ると何かを治療しなきゃいけないんじゃないかという考えをもっているし、そもそもそれを望む姿勢がある。僕らとしては、居場所にいてもいいと言うけれど、いつまでいいですかという感じになってしまうところがあり、やっぱり長く続けられることとか非常に重要だと思いました。

○会長 工藤委員、お願いします。

○工藤委員 工藤と申します。私は当事者の家族ということで来ています。

この居場所ということでお話をいただいたとき実は困りました。

2019年から20年にかけて、息子がひきこもりというような状況になってしまって、その時は、県外にいたので、まず岐阜に戻ることが先決ということで、かなりコミュニケーションを取ったんですが、そのコミュニケーションも生活が破綻していたのでスマホを使えない状態で唯一パソコンのGmailでやり取りをしたので、結構時間がかかりました。

何とか岐阜の方に戻しまして、そこから生活が始まるんですが、それはもちろん私達家族の生活している場所が居場所になると思うんですが、そのためには衣食住、それから彼がウェブをやっているので、ウェブができる環境、これが揃ってないと生活ができないような感じでした。

ただ、そこから大事なのは、まず家族の生活環境と彼の生活環境とは明らかに違います。食事に対しても我々とは一緒に食べないので、彼のリズムの生活になり、そこを家族全体でコミュニケーションはしてませんが、彼のリズムを考えながら我々もその中で、できるだけ対応するような感じで、生活環境を整える形で今はやっております。

やっとここへ来まして、ちょっと落ち着いたといったところに来ているものですから、安心はしています。まだそういう状況になったばかりなので心配しています。

これまでに岐阜市の保健所の担当者に相談し、本人の了承を得た上で、自宅に来てもらい、面談をしていただきました。その後は電話のやり取りなどをし、岐阜市に戻り3年目となる今は、北保健センターへ話を聞きに行くようになりました。

ここが継続的に出ていくことによって先ほどの居場所、結局彼にとって合うようなところがあれば当然自主的に行ってくれるだろうと期待をしております。

○会長 杉浦委員、お願いします。

○杉浦委員 今居場所という意味で僕がやってるのは中央青少年会館で、今日も実際やっているんですが、支援連携会議に出席するため、ちょっと抜けさせていただいています。毎週火曜日に5時から8時半までやってます。

スーパー銭湯ふじの湯は、別に居場所ですと言っているわけではないという居場所と思って来ている人がいる感じです。要は中央青少年会館で居場所をやっている私が、ふじの湯の食事処もやっているの、行きやすいから来るというパターンです。

どうせ食事するなら、風呂に入らなくてもご飯を食べに来る人も含めて、足を運んできてくれ、結局そこで中央青少年会館で顔を合わせているメンバーがまた土曜日、日曜日に来たって感じで付き合いが深まっていく。そんな流れが、いわゆる一般的な飲食店と違いがあるとすると、うちがやってる飲食店だから、そういうメンバーが集まっているという要素があります。

どんな人がそこにいるのかも居場所には重要な要素であることも一つかと思いますし、顔なじみがスタッフに限らず来ているメンバーの中で馴染んでくると非常に頻繁に足を運ぶことができるようになるかなと感じています。

でも、先ほど篠田さんが言われたとおりで、彼らがひきこもっていると思っていないというか、ひきこもりとは言えないけれど、いろいろ話をしていくと元ひきこもってましたとか、下手をするとひきこもってしまいそうとか、そういう要素がある人たちが、言い方はわからないですけど、無事世の中をウロウロしているというか、じゃあ、生き生きと生活しているかと言われるとどうなのかなという点は、正直感じる。

なので、どこに活動の重点を置いているかという点で言うと今、僕は閉じこもっているぐらいの人たちには、どうしていいかわからないので、そこに強くアプローチしていくことができずじまいで、せめて出てきている人たちに対してできることがあればというスタンスで場の設定をしているところです。

中央青少年会館の話に戻すと、本当は施設の名前のとおり35歳までの利用が目指されている場所だとは思うんです。私どもも通常やってる学習支援で来ている子どもたち、本来は中学生までが対象で岐阜市の生活困窮者支援として学習支援をやっているんですけども、その子たちが高校生になり、勉強しないんだけども来るとか、教えてくれる人はいないけど来るとかですね、家庭の中のいろんな事情を踏まえて、家にあんまりいたくないとか、そういう子どもたちが少なからずいて、それが高校生になり、学習支援の対象外となったときに縁が切れてしまう可能性があるところを、居場所として作って如果能たら、10代後半から20代前半ぐらいをそういう場所として提供できたらいいなという思いも含めて中央青少年会館さんをお願いして3年目になってきているところです。

蓋を開けてみると、ずっと今までの付き合いで、いっぱいという社会的居場所に来ている人たちも、僕もスタッフで入っていることもありまして、そこから居場所作りを始めるよというのが伝わっていたところ、結局35歳以上の人たちがわんさか来てくれまして、実際人数割合的に言うと35歳以下と35歳より上の方で1対4ぐらいの割合で、毎回20名弱ぐらいでやってます。

ただそれも年齢で見えてしまえばそうなんですけど、こうなってもいいんじゃ

ないかなと思っています。実は1対4の4に76歳のおじいちゃんが1人来ていて、その方はお孫さんの世話をしてくれています。ご自身のお孫さんが違う地域に住んでいて大変なことになっていて、母親も1人で頑張ったけれど、もう放棄してしまって、おじいちゃんおばあちゃんが見ざるを得ないということで岐阜の実家に戻ってこられた。

それで一生懸命付き合ってくださっている。うちと繋がってお孫さんをいつも一緒に連れてきてくださっている。お孫さんの理解をするために、もしかしたらうちの孫は10年後20年後30年後、こういう人たちになるのかなというのを見ながら、参加している人たちとおじいちゃんが会話をしているわけです。自分の子どもの理解を含めて、その中堅どころに間に入ってる当事者的な人たちと普段接してこなかったおじい様がその場で自分の中で理解を深めていかれてるっていう姿を見ていると、例えばその保護者の方だけで集まれる会というのもそれも大事だと思うんですけど、あんまり壁のない場所でそこに半分手伝いみたいな形で入ってきてくださって、その当事者だった人と当事者性を持つてる人たちの気持ち、自分のお子さん以外の気持ちも日常的に聞いていて、いろんな気づきを持たれていくことからの支援も広がっていく気はしています。

幸い、青少年会館から部屋はたくさん貸してくださっているので、うちが1日夕方から20人程度のために5部屋ぐらい使っているんで、使わずに済んでしまった日もありますけれども、そういう意味では非常に体制としては協力的であるというところと、あとはその市の方もちょっと年齢の部分とかはおいておいてタッグを組んでやっていくような場にされるのも一ついい居場所になるのかなと思っています。

○藤原委員 和光会グループの藤原と申します。

和光会グループは医療、介護、福祉事業を提供しているグループです。

私からは、この分野の事業を実施してきた中で、私自身が出会ってきた方々を中心にお話をさせて頂こうと思っています。また皆様からの意見や杉浦委員の活動をネットで拝見させて頂く中で、ひきこもりの方々の居場所や置かれている環境を知り、今までの私の考え方も変わってきています。

今までの経緯の中で、障がい者の方々に対して入所、通所施設、リハビリを提供する病院、在宅で医療を受ける訪問診療等、子どもから高齢者まで幅広くかかわってきています。この数年は、在宅医療に関り医師と共にご自宅へ訪問診療にお伺いする事が多くなってきました。最近課題となっている8050や、90・70・30の三世代のその様なお自宅に訪問をする事があります。まさに、そ

こで初めて、「あれ」と思うような場面を何度も体験する事があります。「80代のこの高齢者の方は今まで一人暮らしと思っていたがそうではなかったんだ。」と。実は30年もひきこもっている息子さんと暮らしておられた事を知ることがあります。本当にどの様に暮らしてこられたのか、これからの事を心配して私たちを受け入れてくださったのだとその方の今までの思いを感じます。

80歳代、あるいは90歳代の方々は、癌とわかっていてもひきこもりのお子さんを置いて病院で治療を優先できなかったのでしょう。痛みが強くなったことにより往診を受け入れてくださり、私たちは往診で麻薬管理をしながら緩和ケアを提供していくのです。痛みを取りさり、この後のお子さんに対して後見人制度の紹介や、各種の制度、他の職種との連携をしながら、この方々の支援をしていきます。

初めてご自宅にお邪魔してすぐ、その問題が浮上ってきて、あわてて家族背景を調べていくことが毎回のようにあります。もっと前に何とかならなかったかなって想いもたくさんありながら、それでもどうしたらいいかという課題を突き付けられています。

それ以外では、放課後等デイサービスや児童発達支援事業所も運営していますが、その中で発達障害のお子さんを抱えたお母さんたちの孤立だとか、登校拒否、そこからひきこもりになっていく状況、また青年期になって職場でうまくいかず退職を繰り返し、失敗体験から青年期からひきこもりになっていくケースを見受けます。

基礎疾患に精神疾患をお持ちの方が、ひきこもりになっていくケースも多く見られます。いろんなケースを見た結果、「これって前から何とかならなかったかな。」と思いながら、今回、その方々の居場所を含めて岐阜市や岐阜県の体制。どうなっているのかなといういろいろ調べながらこのように思いを重ねて考える事がありました。

実は介護業界の長い間の積み重ねの中に、介護保険制度が設定の一つの節目があります。大きな事は認知症に対しての考え方でした。認知症は、昔は「呆け」と言われ社会的にもいみ嫌われていた時代が長くありました。認知症を患われた方をお世話されているご家族は、徘徊を防止するために外に出て行かせない、あるいは、隣近所に恥ずかしいからと部屋に閉じ込め鍵をかける事が常時ありました。お世話の仕方がわからず、異常な行動に対してつい虐待をする様な時代がありました。

誰もが認知症という言葉を知る時代となり、あの人呆けたとか、あそこの家は近づかない方がいいなどという地域の中で、家族が孤立する様な状況は皆無となりましたが、当時は困り果てたご家族の方たちが「ボケ老人の会」、現在は認知症と家族の会を立ち上げ、そして日本全国に支部が出来、多くの活動がされてきました。ご家族の方たちが立ち上げられたその会が、社会を動かすのには長い時間がかかりましたが、制度として認知症基本法が2024年に施行される事になりました。認知症施策推進総合戦略オレンジプランや地域包括ケアシステム、共生社会という事が、当たり前と言われるようになってきて、本当に長い時間がかかりましたが「どこに住んでいてもどのような認知症の状態でもここに住んでいていいんだ。」と当たり前で認知症のことを皆さんが理解され、当たり前に住み慣れた地域で住み続けることができるようになってきたのです。

私は医療、介護事業を運営しながら、それらの現場で経過を見てきました。時代背景は違いますが、認知症の経緯で例えるとするならば、どのように支援をしたらいいか、どのような問題があるのか、どのような薬があるのか、どのようにしていったらこの人はここでずっと住み続ける事ができるのかと考えていたあの頃。最後は癌になれようが住みたいところで住む制度がいっぱい出来て、地域の方々も理解して一緒に居場所づくりに参加されてきたあの頃。ひきこもりもまさにその始まりの段階にあるのではないかと思います。「ひきこもり」についての体制整備はこれからここに着手していくんだなど。

では、何をまず行うかという、個人に対してどうするかを始めていくのだと思います。個人から集団、そして社会に働きかけていくという形になります。認知症の経過から例えれば、「病気を知る」という事からなんです。地域の人たちも専門職も病気を知るということを始めました。遠藤先生はご専門なのでとてもよく知っておられると思いますが、私は看護師の立場として、ひきこもりになられた方々の原因には、様々な基礎疾患による方や、発達障害等の精神疾患がある方、あるいは疾患は無くても、学校や保育園、職場で、教師や保育士、上司のたった一言によって傷ついてひきこもりになってしまった方、最近増えたのはコロナの後遺症や、コロナ渦で一度も大学に出席できなかった体験により、精神を病みひきこもりになった方も多く見てきました。

またマスク姿しか見てこなかった乳幼児期のお子さんたちが、これから大変な時期を迎える事になるのではないかと危惧しています。マスクを付けた人し

か見たことがなかった子どもたちがマスクを外した姿に恐怖を覚え、それがトラウマになったりします。逆にマスク依存症でマスクが外せない子どもたちも増えています。これらは大きな問題になってくるでしょうし、ひきこもりと言う概念として捉えれば、ものすごい勢いで増えてくるんだなと現場の中にいて思います。

認知症が当初、忌み嫌われたように、ひきこもりはだらしがないとか、親が悪いという偏見はまだあります。医療業界にも当たり前にそういった風土がまだあります。

専門職がきちんとそれを理解しないといけない。学校職員も理解しなければならない。地域の方も理解をしなければならない。それがひきこもりの方々の居場所づくりを促進する事に繋がると思います。もちろん、家族の方が集まる場所や本人が発信できる場所、それ以外には、専門職の人たちが理解を深められるような話し合いの場所や勉強する場所づくりも必要です。

今認知症の方では若年性の認知症の方たちがどんどん自分自身の事をサロンや専門職の集まりに参加して発信されております。そのため広く情報を知ることができるようになりました。私達は発信できる人たちからどんどん学ばなければいけないと思います。学ぶことによって、地域にいる人や専門職は、多少なりとも信頼関係ができ、居場所づくりに繋がって行きます。しかし実際に県や市でそのような取り組みを行っている数は少ないなと思いました。

認知症の方たちのサロンはたくさんできています。同じようにひきこもりの方々のサロンがたくさんできてきてもいいだろうと思います。

また、杉浦委員も言われたように、役割があることが大きいです。例えば共生型サービスとしてデイサービスの中で、障がいの皆さんも一緒に、誰でも支援が受けられ、誰でも支援者になれる場所を提供しなくてはいけないと感じています。ひきこもりの方だけではなく、障がいの方も高齢者も認知症の方も全体を含めた制度、それこそ地域包括ケアと共生型を含んだ広い視野で見た居場所づくりを考えてもいいかなと思います。

私達が学べる場所づくりと、個人との接点をつくる場所づくり。そこに誰でも集まれる場所を居場所という意味で捉えるべきと思いました。

○会長 山田武司委員、お願いします。

○山田(武)委員 岐阜協立大学の山田と申します。よろしくお願いします。

まずオンラインでの居場所ですが、時代が進んでいて、もう全然私の方はオン

ラインとかネットは得意ではないんですが、岐阜市はインターネットを活用してオンラインで居場所を行っていくということでしたけれど、この間話が出ていましたが、家から出れない方、誰でも参加できるというのは非常にいいことかなと思いました。

ただ、それをどう広げて、そこにどう繋げていくのか、そこは本当にこちらからの情報発信と相手にどう受け止めてもらうかも含めて今後課題になるかと思いますが、形としてはいいのかなと思います。

それから居場所に行ける方、行けない方というところでも本当に大きな問題です。親御さんとしては本当に家から出られれば、本当にまずは、万々歳っていうところがあるんだなということをつくづく思います。

ただ、この場合もやはり居場所に行ける方に関しても、同じように、先ほど「生き生きと生活しているわけではない。」かとも言われたと思うんですけど、やっぱり生きづらさを抱えながら、かろうじて居場所に行けるということかなと思います。やはりなかなか人と接することができなくて、そこでコミュニケーションも取れなくて、自分の社会の中で居場所が見つからない中で生きづらさを感じながら生きている人たちへの、大きな形での支援になればいいのかなということも思いました。

あと、岐阜市には多様な居場所があるということを本当にわかりました。非常にいろんな居場所があって選べるというのは非常にいいのかなということや、いろんな居場所を選択している方もいるのは非常にいいことだと思います。

こういう居場所づくりに関してもぜひ支援が必要だと思いますし、支援が必要な居場所ってというのは当事者だけじゃなくて、親の居場所であったり専門家が学べる居場所も必要なんだということで、そういうことを含めて様々な居場所です。

先ほど江戸川区では兄弟姉妹の居場所もありましたけど、やっぱりいろんな居場所があるといいのかなと思います。

僕としては居場所として大切なことは、本当にありきたりなことになるかもしれないかもしれませんが、やっぱり安心できる場であることと、それから繋がれる場であること、いつでも戻れる場であるということが大切でないかと思います。

安心できる場というのは、この間、委員さんの発言からもありましたように誰でも行けるってことですけれど、そこに行って、何もしなくてもいいという

ことです。いるだけでもいいと言う。特に対面のリアルの居場所ですと何かしないといけない、当てられるかもしれない、発言しないといけないと思うだけじゃなくて、何もしなくてもいるだけでいい。それだけでも受け入れてもらえるってことです。また、行ってもいいし行かなくてもいいし、それこそ時間に間に合わなくてもいいし終わるギリギリ5分前に行って帰ってもいいし、逆に言えば、最初に5分いて帰ってもいいしっていう、そういうのもいいと思うんです。このようなプログラムや決まりの緩さっていうのは、やっぱり利用者にとっては必要なのかなと思います。

結局何もしなくてもいるだけでも歓迎される、受け止められるという部分です。これは大切なかなとも思いました。

あとそこで何か失敗してもうまくできなくても、なかなか普通の社会では、失敗すると注意されるとか、からかわれるとか、そういう経験があったと思うんですけど、安心して逆に失敗できる、安心してうまくできなくてもそれをさらけ出せるような、そんな場所になるといいのかなっていうのは思いました。

それから繋がれる場という面においては、居場所の中での繋がりと居場所を通しての繋がりが、あるんじゃないかと思いました。

居場所の中での繋がりにっていうのは、まずは先ほど言いましたようにいるだけでもいいということで、そのままの自分が受け止めてもらえる関係がそこで作れる。それから、やはりひきこもっていた者同士です、つらい思いをしていた者同士で思いを分かち合うような関係ができる。

それからグループになるわけですから、そこで役割を担うことによって、「ありがとうね」という一言で承認が得られるとか、そういう関係もあるでしょう。それから自分が居場所に通ってるときに新しい方が入ってきて、後輩が入ったときにその後輩を支えるようなそういう役割でもあると思う。

そして相互に支え合えるような居場所の中での関係性作りっていうのが、必要なかなとも思いました。

さらに居場所を通して繋がるということも、ここから発展していくのかなっていうふうに思います。これは居場所を通して居場所以外の人や社会と関わっていくということです。例えば、居場所で何か講座とか教室を開催して講師に来てもらうとか、ボランティアさんに来てもらうという、このように居場所に新たな人に来てもらって繋がることもできると思います。

ただ、ひきこもりの方のことにしても知らないと、利用者が傷つけられてしまうということもありますので、ひきこもりの方を知っていく、理解していくということを前提で、まず来ていただいて、そして繋がっていくことが必要かなと思う。

それから居場所以外の場に出かけることもできると思います。先ほどオフ会を飛騨市で開いたという報告もあったんですけど、やはり居場所のメンバーで居場所の行事として居場所以外の場所に出かけて行って、そして社会やいろんな人と繋がっていく。居場所で仲良くなって安心できる仲間で、どこか出かけていくっていうこともできるのかなと思いました。

最後にいつでも戻る場っていうのは、いつでも顔を出せるということと、いつでも通うことが再開できるってことがあるんじゃないかと思います。

居場所に通ってだんだん元気になって、居場所以外の場所でボランティア活動したり復学したり、それから仕事を始めるっていう方もいると思うんですけど、それで居場所と切れてしまうのではなくて、最初のところでも働いてる方も来ているという話もあったと思うんですが、いろんな活動をしながらも、ちよくちよく居場所に顔を出せる。そのときに、「こういうことがあって、大変なことがあって、辛かった。」とかいう話をして、愚痴を言えて慰めてもらえたり、支えてもらえることによって、居場所以外での活動が支えられるってこともあるかと思います。

それからいったん居場所をでてしまった方ですね。それでも次のところがうまくいくとは限らないと思うんですね。また何か辛いことがあって再び行けなくなるかもしれません。仕事でも何でも行けなくなってしまったときに、家だけじゃなくて居場所に通ってそこで受け止めてもらえるっていう、自分が行ける場所があるっていう安心感があるということです。

それは、居場所に行けなくなって家にひきこもってしまっても、ちょっとしたきっかけや、元気な時に、「また居場所に行けば仲間がいる。」そのような安心感があるような、そういった戻れる場という居場所も必要ではないかということです。

○会長 最後に山田裕理委員、お願いします

○山田(裕)委員 私はちょっと皆さんと立場が違います。

民生委員として直接ひきこもってる方に接したことがないんです。

ちょうど私はこの京町地区の会長をやっているんですが京町地区、1,800世帯ぐらいの中で、掴んでるのは3人。でも、誰1人と接触したことがない。

それで先ほども言われましたように認知症の場合は、オレンジカフェとかそういうので、私達も認知症サポートっていう講座も受けて、それで勉強もしてきました。だからそういう人たちに接することは、そうすればよかったんだっていうのもわかって、それから別は何の違和感もなく認知症の方に接することができるようになったんですけど、ひきこもりのことはまだ全然勉強もしていなくて、この会議に参加したのは、まずそういうことを知りたかった。どういうふうにして接していいのかも全くわからなくてこういうところでいろんな話が聞けたらそれを地域の民生委員の人に教えられる伝えられる。それで多少とも進めるかなと思って参加したもんですからテーマが居場所とか支援が届いていない方とかそういう話なんですけど、私はもっとその手前でどういうふうにそういう人たちと接していいかっていうことを家族の会の方とかそういう方から伺いたかった。それでこの会に参加したので、あまり皆さんみたいな詳しいことも何もわからないので先ほどの東京都江戸川区の話を聞いたときも、そうなんだ、そうすればいいんだと納得しながら、でもこれをその人に伝えるにはどうしたらいいんだろうってまずそこができないなと思って、まだまだだなと思っています。

また、これからよろしく願いいたします。

○会長 本日欠席の南出委員の御発言予定であった内容については事務局の方から願います

○事務局 「居場所」全般についての総論で言うとしたら、「支援」というスタンスに立たないことが最も肝心な点になるかと思います。

「居場所をつくる」というのは、あくまで「居場所になりうる場をつくる」ことでしかなく、その主体はそこに集う人たち自身になります。

支援専門職がつくる居場所は、どうしても「つくる側／参加する側」という対比が色濃くなりがちで、当事者の側は「ゲスト」的な扱いになってしまうことが多いように思います。

このあたりの議論は、「ユースワーク」という実践概念が最も適切に表しているかと思いますが、「支援」という語につきまといがちな「何かをしてあげる」という方向性からいかに脱却できるのかという点が、「居場所づくり」には欠かせない要素だと思います。

関連して、制度事業には「〇〇のため」という目的が不可欠ですが、それらが前面化してしまうと、「居場所の手段化」が起きてしまい、居心地いい居場所ではなくなってしまうという部分があるので、制度化あるいは「成果指標づくり」には相当な注意が必要です。

あとは、「何もしなくても過ごせる場」というように、無目的かつプログラ

ムもない場の方が行きやすい人もいれば、「〇〇する場」というように、活動内容が明確な方が、「話さなくてもいい」といった感じで行きやすい人もいるので、両方のニーズにうまく応えられるような場の仕掛けができるといいのかなと思います。以上です。

○会長 ありがとうございました。

皆様からご意見いただきましたので、それを踏まえて意見交換をこれから行いたいと思います。

篠田副会長、お願いします。

○篠田副会長 何点か皆様のご意見を聞いて、なるほどと思うことがありました。

まず、藤原さんのおそらくこれから8050で、親の介護で入ったら、ひきこもりの状態の方が出てくるというのは、爆発的に増えると私は思います。

これは田中室長の重層的支援推進室がこれから本当に大変な一気に来るんじゃないかっていうことを私は心配しています。

その前になんでこれがわからなかったかっていうのは、いろんな行政の方も早く知りたいっていうふうに、社協の方も他の、岐阜市以外の方でおっしゃる方がいます。ここをどうしていくのかっていうことです。

私は大きくこのひきこもりが学童期とそれと対する8050のところと、それから中間ですよ、5020とか7040とか6030で大きく三つに分けて私は考えているんです。

一つ学童期にどうメスを入れていくのかっていうのはすごく大事なところなんだけれど、飛騨市で、思春期検診と作業療法士を小中学校に入れると、こういう根本的な部分にもメスを入れていくっていうのが岐阜市は負けてますよ。都竹市長はさすがだなと思いました。

まだつい最近ですけど、こういうところにメスを入れて思春期検診は予防医療のモデルです。全国に先駆けて学校診断とは別に医師が心の状態、家庭や学校で悩みなどを診察し、心身に不調が生じる前の予防に繋げるということで飛騨市は始めましたから、ぜひとも私この会に教育の現場の方に入ってもらいたいなっていうのを一つ思います。これ池上さんも前に言ってみえたと思います。

それから社会の理解がなかなか進まない。これは池上さんも今頑張ってくださいますが、私達がよりどころとなる法律がないんです。だから、ぜひともここを早く制定させたいなと私と池上さんは思っておりますので、皆様もぜひここはご協力をいただきたいと思います。

それから先ほど、杉浦委員が、居場所に来ている方が社会の中で生き生きと

していないと。

私は、やはり少しでもいいから自分でお金を稼がないと、そんなこと関係ないと思ってはいますがやっぱり就労っていうのが大事だと私は思ってるんです。だって40代の子がお金がなきゃ、全部親に頼ってて何ができますか。だからそこら辺も考えると、私はこの提案ですけど、岐阜市がその居場所づくりのところにそういった、就労支援はありますよB型とかA型とかこれは認定が下りている人です。ひきこもりがそもそも認定、医者にも行けず認定も下りていなくてグレーなんです。そういう人たちの居場所とともに就労支援ができないかなってというのは実は思っています。市役所はいろんな仕事があります。そういうものをどなたかが指導して、障がい者手帳がなくても、そこで指導できて、社会に出ていくような何かそういうのをリンクさせられないかなってというのが実は思っています。

それとあとは親も何とかしたい。このままでは駄目。ほとんどの人がやっぱり少しは収入が欲しいと、これは親は誰でも、そんなに潤沢なお金を残せるわけではないし、私自身ならどうするのって全ての親が思っています。

だからそこでちょっと考えて私達もただ居場所を作ったりとかそういうことだけではなくて、考えていきたいところ。

とにかく第一歩が難しいということは皆さんご承知おきください。

○会長 ありがとうございます。他にご発言ございますでしょうか。

○中川副会長 なかなかいいお話をいろんなところから聞かせていただいて良かったです。

就労という問題は大きな問題として、出てきているんですけど、今日池上さんからいただいたこの「たびだち」という雑誌の中でも、親亡き後を生きてきた女性の話が出ましたが、私も去年そんな方と出会い、彼女は50代の女性なんですけれど、ご両親とも亡くなって1人で困窮されていたんですが、就労の話は実は途中で何度か行政の側からも働きかけがあったんですよ。もう生活が行き詰まっているにもかかわらず、彼女はなんでそのときに就職しなかったのかって、そしたら彼女の話は、実はさっきもちょっとでてきたかもしれないけれど、つまり生きていてもいいと思えない状況にいたんです。

そんな中で居場所に繋がって、要するに1人でずっと電気も水道も切れた家で過ごしてきていたので、完全に孤立してたんだと思いますけれど、そして仲間ができ、いろんなことで対話がそこでいろんな人たちと話をすることができ、居場所に繋がったことで、もう1回生き直してみようというか生きてみようというふうに思えるようになった。そのタイミングで就職の話が来たんですよ。

彼女今働いていますけれど、つまりなんでこの子たちお金もないのに働かないんだよとどうしても見がちなんだけれど、その前にやっぱりこの時代から社会で生きていてもいいんだと思える場所が彼らにとっても必要なんです。それが要するに広い意味での居場所なんだと僕は思っていて、社会、家から外へ出てきたときに、次は就労だっていう話では全然なくて元気にさっき篠田さんの話では出てこない人はどうするんだっていうんだけれど、出てきても実は苦しんでる人もたくさんいて、僕なんかも30年か40年ぐらいこんなことをやっているもんですから、何人か途中でも亡くした人たちがいますよ。

その子たちは表向きは働いてました。でもずっと心の中で苦しいものを抱えながら無理して無理して働いて来たんだということにやっぱり気づかないと一足飛びに就労なんていう話は多分なかなかないんだろなっていうふうに思っていて、居場所が実は大事なものは、生きていてもいいんだと思える場所がその人が出会えるかどうかということなんだろなと思います。

○篠田副会長 もう一つだけ言わせていただくと先ほど杉浦さんのお話で、おじいさんが出てきた、これはとっても大事なことで、ひきこもり支援には人生の経験の知恵がいるってずっと言い続けています。特にそういった人材の支援の人事、支援って言ったらいけないけれども、ここにそういう人たちにも関わってもらいたいという思いがあります。70代以上の認知になったらいけません、まだまだ元気な、それで人生の経験をたっぷりした、包容力のある人たちがいっぱいいるんです。そういう人たちがうまく使えないかなって関わり合っていただけないかなっていう思いがあります。

○会長 ありがとうございます。

他にご発言いかがでしょうか。

他に何もないかな。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

はい、様々なご意見をいただきまして、ありがとうございました。

もう本当に皆さんの話を聞いてても、いろいろ私も話したいことがたくさんあるんですけれども、ちょっと時間が全く足りませんので、ただ非常に共通している部分もいくつもキーワード、メッセージもたくさん出てきてました。

本当にもう皆さんがおっしゃる通り、もう圧倒的に多くの方がこれは私の捉え方なんですけれど、やはりこの家から出れない、姿が見えない、声を発信できないそういう方々ってのはやっぱりこの今の社会や地域から避難している状態なんだっていうところなんです。

今、中川さんおっしゃったように、生きていきたいと思えていないということです。社会から誰からも必要とされていないと言えばそこが一番もう本質的

なところなんだろうと思うんです。本人たちの心情としては。そこにどうメッセージを届けていくかっていう情報を伝えていくかっていうところが問われているんだろうというふうに思います。

山田武司委員から非常にわかりやすく安心できる場、繋がれる場そしていつでも戻れる場という非常にこういう本当に何もしなくてもいいそういう緩さ、緩い部分といろんな居場所の中での繋がり、そして居場所を通しての外部の人との繋がり、オフ会とかです、そういったことにも繋がっていくような、いつでも戻ってこられるっていうことです。再開できる、働いている人も来られるってこれも私もこれ江戸川区ではないんですけどずっと10年ぐらい続けてきた庵という居場所で、よく実際働かれてる方が来られて、自分もそうだったから、あるいは自分もこの居場所に通ってある時、ぱっと就労したんですけども、その人が帰り際に来て寄付金を置いていくんですよ。すごく自分もここで支えてもらえたから応援したいんだって言うんです。こういう何か循環とかこういうパターンを作れるといいなというふうに思っています。

来年度岐阜市において居場所事業を実施するにあたっては本日の協議内容を参考に検討していただければと思っていますので、岐阜市の皆様にはよろしく願いいたします。

最後に議題の3分科会の設置についてです。

本支援連携会議に特定のテーマについて議論するための分科会を設置したいと思っております。

これは例えば家族です、篠田さんおっしゃっているようにやはりこの家族の、あるいは支援者側の意見をまとめていただく必要がある場合に、対象となる立場の委員を中心に分科会を設置し、意見を集約し本会議で発表していただくことを想定しております。

必要に応じて設置することにしたいと考えていますけれども皆様よろしいですか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○会長 皆さん賛成していただいたということで事務局の方でそれでは分科会設置のための設置要綱の改正手続きを行いますので、よろしくお願いしたいと思います。

これにて本日本日予定の議事は全て終結いたしました。事務局の方から何かありますでしょうか。

○事務局 遅い時間から会議にご参加いただき誠にありがとうございました。次の会議につきましては、10月下旬に開催したいと思っておりますので後日日程調整のご連絡を差し上げます。ご協力のほどよろしくお願いいたしま

す。

また本日の会議の会議録をまた作成をいたしまして、公表いたしますのでご承知おきをください。

よろしくお願いいたします。

○会長 本日予定しておりました内容は全て終了いたしました。これにて令和6年度第1回岐阜市ひきこもり支援連携会議を終結いたします。

ありがとうございました。

次回の会議についてもまた引き続きよろしくお願いいたします。